

ばかりでした。

引揚げ後、化粧品品の製造を始め、当時は現金売り、次ぎは手形取引となり、不渡が続出し、ゆきづまり、歯ブラシ販売に転業しました。がこれまた化粧品の場合と同様で、経験がないとできませんので、思いきって沖縄へ行きました。そして、今は海産物モックの輸入をしています。

現地除隊と引揚記

北海道 南 栄次郎

昭和十二年九月一日網走市にて目黒輜重兵第一連隊に召集されて、兵站自動車第十三中隊に入隊、十月十四日北支糖沾に上陸し境界線に沿って南下し黄河近くまで進み、十一月末に奉天經由大連より十二月一日上海に上陸して南京攻略及び第一次、二次除州戦に参加し、昭和十四年夏再び北支に戻り北支航空（現在北京飛行場）付き輸送隊となり、昭和十六年四月第三次帰還命令に依り約

三十人内地に帰還することになったが、私は当時独身三十二歳であったので、北京市にて現地除隊することを決意し、北支の鉄道である華北交通株式会社に入社、北京建設事務所勤務となり、現場に出張勤務中、十六年十二月大東亜戦争が始まり昭和十九年夏本社に転勤警務局勤務となり翌二十年八月十五日局長室にて終戦の詔勅を聞きました。

日華合弁であった会社が中国側に移譲されることとなり、翌二十一年一月まで中国側に事務引継ぎのため留用されて勤務しました。

平静であった北京市内も終戦とともに次第に治安が悪くなり、私宅も会社に出勤中には付近住民及び中国兵に依り家財道具、衣服等一切が皆無の状態になり、近所の邦人の方や会社同僚の方々の温情に依り衣類その他を頂き生活を続けておりましたが、十二月初に郊外の収容所に移り六畳間に二家族、その後八畳間に四家族の不自由な生活をしましたが、私共は妻と長女の三人家族で、妻は身重であったこともあって特別のほからいで三月末に引揚命令が出て郊外駅から天津収容所へと移動したので

すが、天津まで約二時間くらい行程でしたが私共は無蓋貨車に乗せられ出発したが途中で機関士から状況悪化のため運行不能と言いつつ停車すること二、三回、そのつど引揚者から所持金を集めて彼等に渡すと動き出し、十時頃発車して夜の十二時頃天津収容所の近くにきたとき、警備兵に銃撃されて負傷者も出たが、やっとの思いで収容所にはいることが出来たのです。

収容所滞在三日間中は戦犯容疑者の摘発呼出し調査が行われて不安な思いがしました。

四月初め糖站港より引揚舟LTSにて出港五日間の玄海灘の荒波と戦いながら、夢にまで見た青い島日本が見え初め、佐世保港付近の新設引揚港に上陸し、日本の土を強くふむことが出来たときほど感謝したことはありませんでした。

しかし婦女子は引揚者輸送車に、男性はリュックを背負い徒歩で約四キロの山道を歩いたのですが、途中で妻達の乗っていた車が対向車との接触事故に依り、私の妻一人が右腕骨折右手甲部及顔面前歯折損の重傷を負い、収容所にて応急手当の上、引揚者達とは反対方向の旧海

軍大村病院に入院すること一か月あまりで当時海軍側と九州医大との引継等の関係で手術が遅れ入院一か月後に行われ、一週間後にギブスを行い腕を首に吊り、大きな腹を抱えて二歳の長女を連れての帰郷でしたが、乗船地で納めた三十円と援護局からの二千元の見舞金も使い果たして無一文丸裸同様のあわれな姿で実に恥ずかしい限りでした。

その後負傷も快復し、また二女も無事出産し十二月、漸く就職口が決り当時は食、住、職の順に先決で妻の母宅の居間に暫く起居し馴れぬ職場であったが、辛いときには引揚時を思い出し、またときには楽しかった北京での生活を語り合いながら、今日まで頑張って来ました。家族の者達も皆健在であることを何より心から感謝しながら余生を過ごしております。

私共の引揚げは日本本土に上陸してからの事故でしたので、奥地満州や樺太等の引揚げに苦勞された方々を思う時、何か申し訳ない思いが致します。